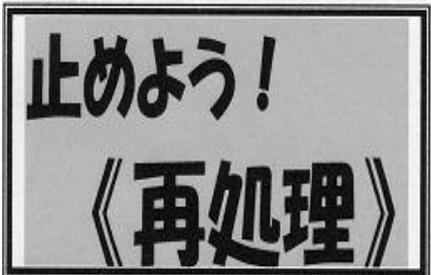


三陸の海を放射能から守る
岩手の会 (略称) 三陸の海・岩手の会
 郵便振替 02240-5-102650
 ホームページ 《再処理/岩手の環境》
<http://sanriku.my.coocan.jp/>
 《本紙の全バックナンバー掲載》



《天恵の海》
 2016(平成28)年
 3月15日
 第163号
 編集事務局 S.Oshida
 TEL・FAX 019-623-1636

福島県甲状腺検査 ガン確定・疑い 合計166人

「福島県民健康調査における中間取りまとめ」提案される

「事故前の数十倍で甲状腺がんが発見されている」

「子ども甲状腺検査」集計経過

福島県ホームページ 福島県民健康調査検討委員会資料

先行検査(一巡め検査) 第20回 調査検討委員会

年度	市町村	対象者(人)	受検者(人)	がん及び疑い(人)	手術(人)
2011	13	47,768	41,810	15	15
2012	12	161,129	139,338	56	52
2013	34	158,788	119,328	42	32
合計	59	367,685	300,476	113	99
(先行検査確定版2015. 6. 30集計)				115	100

* がんの疑い2人・追加(2016) ** 手術後良性1人

本格検査(二巡め検査) 第22回 調査検討委員会

年度	市町村	対象者	受検者	がん・疑い	手術
2014	25	216,874	155,536	45	
2015	34	164,387	81,059	6	
合計	59	381,261	236,595	51	16

(本検査実施状況 2015. 12. 31集計)

先行・本格両検査合計 第22回調査検討委員会

がん及び疑い	166	がんと確定	116
--------	------------	-------	------------

(福島民報2016.2.16)

二月一五日、第二回福島県民健康調査検討委員会が開催され、子供の甲状腺検査について、「がん及びその疑い」の子供が合計一六六人に達すると報告されました。うち一一人が手術を受け、全摘あるいは一部の摘出がなされました。

福島原発事故時一八才以下の子供達約三十八万人(本格検査からは事故後一年内出生者も)を対象とするこの調査結果について、同検討委員会は「事故による放射線被曝によるものとは考えにくい」との従来通りの見解を述べていますが、多発であることは認めており、因果関係は別にしても国をあげた早急な対策が必要です。

手遅れになりないうちに救済策を急げ!

インターネット「Our Planet TV」は第二回検討委員会の様子を次のように報じています。

先行検査ではA判定者、本格検査でがん発見

今回、本格検査で発見された「がんあるいは疑い」の子供五一人は先行検査でのB判定の所見は四人だけで、残り二次検査の必要がないと

されるA判定でした。「先行検査後に甲状腺腫瘍が急成長したのではないか」という疑問が出されました。検査を担当した委員は「先行検査のエコー検査では画像判別の見落としもあり得る」と述べました。

数十倍のオーダーで多い

一般罹病数に比較して多いのか少ないのかが議論されました。その結果検討委員会として「地域がん登録で把握されている統計数に比較して数十倍のオーダーで多いがんが発見されている」とする中間とりまとめが了承されました。そして「それほど心配ないがんまで発見する過剰検査結果ではないか」「チェルノブイリに比較し被ばく線量が少なかった」「地域別の発見率に大きな差がない」などの意見がだされ「放射線の影響とは考えにくい」との従前の評価を行いました。

記者会見では「手術症例が多いのはなぜか」「ウクライナでは低い線量でも甲状腺がん多発が見られた」などの質問が出されました。

子供甲状腺がん患者の多発



甲状腺がん 信頼性高いリスクの推定を 国際環境疫学会が日本政府に書簡

国際環境疫学会（ISE）は一月二二日、日本政府の丸川珠代環境大臣並びに環境省保険部長・福島県保健福祉部担当者に對して、F・レイデン会長名で書簡を送り、「福島県民における甲状腺がんのリスクの増加は想定より遙かに大きい」と懸念を表明し、「信頼に足るリスクの推定」を行うよう要請しました。書簡には、昨年一〇月に同学会電子版に公開された岡山大学津田敏秀教授ら研究チームの研究報告を重視し、福島県民健康調

が起きているのは「例外的に高いリスク」であると指摘しています。また津田教授が論文の中で、甲状腺がんの早期発見・早期治療のために、福島県外を含む体系的なスクリーニング（検診）の必要性を言及していることに対してISEは、こうしたスクリーニングの実施は、被ばくを受けた人々の利益となるだけでなく、科学的にも有意義であると指摘しています。

子供達を守るために 今必要なこと

津田敏秀教授が回答集

岡山大学疫学研究グループの「甲状腺がん多発、出来るだけ早い行政の対応を求めろ」という学会論文に対して、福島原発事故の放射線被曝とは断定出来ないなどの批判がありました。

津田教授はこれまでの福島県民健康調査の結果を疫学統計するとこれらの批判はあたらないとし、『批判への回答集』を公表しました。そして確認された甲状腺がん発生について正しいアナウンスこそが急がなければならないと強調しました。

本の紹介 広河隆一著

写真記録 『チェルノブイリと福島』

一人々に何が起きたのか
DAYS JAPAN
二〇一六年三月一日刊 三三五ページ
定価 三七〇四円十税



フォト・ジャーナリスト広河隆一氏が、撮り続けて来た「チェルノブイリと福島」の写真集を刊行しました。チェルノブイリ事故から三〇年、福島事故から五年。二〇一六年の「三・一一」を迎えるにあたって、日本と世界の人々に是非とも手にし読んでほしい写真集です。

と書かれています。なんと「福島」の現状に似る。今後の「福島」は「チェルノブイリ」に学びながら進むしかない。二つの核汚染の大地での生命の記録。さまざまな物語が収められています。

その中のひとつ、心臓が押しつぶされそうな不安と心細さに耐えて甲状腺手術を受けた当時一才の少女ナターシャは、発見が早かったたので幸いにも、不安な気持ちを抱え続けて大人になった。今は二児の母。彼女は福島の子供達に「絶対に困難を乗り越えることが出来ます。将来に向けて力いっぱい生きよう」とエールを送っている。(〇)

本のカバーには「チェルノブイリ事故から三年目、現地では多くのことが隠されていた。四年目、病気があらゆる場所で牙をむき出していった。やがて小児甲状腺がんの発生がピークに達し、多くの村々が消えていった。原発が暴走したとき人間に出来ることは何もない」

公共図書館や学校図書館には利用者のための「リンクエスト制度」があります。ぜひ各地の図書館で閲覧出来るようにしたいものです。

コラム 水めがね 子供達を 被ばくさせてしまった責任



「数十倍のオーダーで甲状腺がんが多発している。しかし、放射線の影響とは考えにくい」福島県民健康調査検討委員会の「中間取りまとめ案」である。ともあれ甲状腺がんが多発している事実を同委員会が認めた。ならば原因に未知の部分があるとしても、最悪の事態を回避するために全力を挙げるべきであろう。◆最年長の当時一八才の子供も今や二二才。人生の一番楽しく希望に満ちた年齢で「甲状腺がん」という大きな不安を背負わされた。この子供たちに甲状腺がんについての正しい情報と知識が提供されねばならない。そして例えば「被ばく手帳」のように生涯にわたる支援制度が作られ、さらには、免疫力を高めるため「放射能のない自然豊かな環境での十分な保養」が提供されねばならない。◆医療機関だけでなく、自治体・学校・地域住民の共同の大事業が必要となる。「甲状腺がん多発」の問題は、私たちに、原発事故に関わった世代としての責任の取り方を問いかけている。(尚)